千葉に建築を訪ねる

一　連載のはじめにひとこと

建築家　三沢　浩

過去二年間にわたってこの「ちば」への連載を、投稿として続けてきましたが、果たして読んでいただけたのかどうか、反応が少ない所から極めて心配してきました。千葉県と関係のあることで直接影響や考え方にぶつかったことを、水や緑や風俗にからめて語ってきたつもりです。書いているうちに次第に色々なことに気付くようになり、東京でも「川の手」である千葉県境に近い所に住んでいることが、これほどまでに身近な問題をもっていたことを、書きながら感じ、それを訴え続けてきたと自ら信じています。

このことは単に、エッセーを連載するということではなくて、新建活動の一部として、千葉支部にも元気印を見出すため、そしてそれを毎月続けて、様子を見るということも考えていたのは、お気付きの通りです。しかしながら、この投稿という仕事は、その地域のために書くことであり、支部を知り、自分も参加しているつもりで、「新建」の活動の内容とからんで、その土地と密接なつながりのあることでなくてはならず、それが意義のあることではないかと考えやってきたのです。

その一方で、私の所属している東京支部『ホワイエ』のためには、三年余の連続で「ちば」のように地域ではなくて、建築つまり「アントニン・レーモンド」の「住宅物語」を書き続けてきました。これは自分の師でもあり、建築デザインの影響も受けた建築家のことであり、自分が幾年も前に彼の許にいて近代建築としての薫陶を受け、その思想に触れ、すでに『自伝』を訳し、評論集『私と日本建築』を訳したりでよく分かっていたから、長いこと連載が出来たのです。

しかし、この千葉支部への一二回のエッセーについて、建築のことを書いて欲しいという訴えが届きました。二年余を経て初めての反応です。常日頃から投稿とは侘しいもの、書いて載せても反応はないし、クレームもつかないし、どうなっているのかという思いが、つのってきていたところでした。発行されているのに手許に届かぬ時もあったりして、マンネリ化したのかとも考えました。面白くなかったのだろうかという疑問も浮かびました。

その折にその大いなる訴えがあったのです。

「千葉の建築について書くと、きっと若い会員の反応がある」ということであれば、これはまともにならなくてはいけないことです。

「他支部では建築を書いて連載しているのに、〈ちば〉にはエッセーなのか」という内容の訴えは、更に強いパンチでありました。そのつもりは一切なかったのですが、建築家が建築を書かずに、千葉関係の体験に終始したのは、やっぱり方向が間違っていたのです。

こうして千葉県内で、触れたことのある建築と環境の評論が出来るかどうかという命題が、おのずと浮かびあがってきました。千葉県にある古い建物、新しい建築を思い起こし、しかも手許に写真などの資料があるもので、評価が出来て、そのことを書ける建築があるのかどうか、なんとか自分でリストをつくってみました。

見たことがあって、分かって、資料があって、それを公開し、内容について書けるものは、意外に少なかったから慌てました。実の所、一時は書く自信を失っていました。リストをつくって眺めて、ひと昔、ふた昔前に見た「現代建築」について、細部に触れることは出来ないと悟ったのです。もう一度、見に行って確かめないともう時代遅れだということも分かり、その機会をつくって戴くことも提案し、多分できるだろうというご返事も大竹さんからいただきました。

従ってまだリストは出来ていません。しかし東京に隣接し、車で一時間以内に行ける場所にある幾多の建築を、特に新しい建築を見ていなかったことに愕然としています。

例えば幕張にある「メッセ」、見ていても写真なし。幾つかの新しい巨大ホテルは出来てからまだ行っていない。企業庁の推進する幕張ニュータウンは、一度も見ていない。それどころか「ディズニーランド」に行ったのも、ひと昔前の完成時だし、ららぽーとにある巨大スキードームの「ザウス」だって中に入ったことはない。千葉市内も随分変わったことだし、ＪＲ駅の周辺にしても、新しい「県庁」にしても、「ポートタワー」も遠くから見るばかりで知らない建物である。「県立図書館」　「文化会館」の写真はあっても、一九七三年のスライドだから恐れ入る。それ以来見ていないのだから、これでは何ともいえない。今の様子がどうであるか知らずには、語るわけにもいかない。いや一方では、その頃と現在との印象比較が出来たら、面白いのではないかとも考えたりしているのです。

古いものも挙げたい。かといって佐倉に行ったのも、成田山新勝寺の門前町を訪ねたのも、同じように古いことだし、町並みも保存状況も大分変わったことは聞いています。斯くの如く古い知識と経験では、写真を含めて何とも事が運べなくなってしまった次第です。

その一方では意志だけはあって、新しい建築評論には、やっぱり違う見方を加えなくてはなるまいと考えたりします。だからこそ、現代最大の人寄せ事業であり、もっともフィクションに富んだ、娯楽の聖地「ディズニーランド」から、建築を語り始めようという気持ちが、次第に固まってきたのです。

今まで、このようなことは考えたこともありませんでした。現代建築を千葉で語るには、現代日本のトップを維持し、建築論の上でも右に出る人はいない、大谷幸夫氏の最近の作品を挙げる方が良かろうとか、幕張に新たな息吹を与え、さらに新しい構造を加えた、槇文彦氏の作品をつぶさに語るべきだろうとか、古くてもいいから芦原義信氏の巨大建築を挙げようとか、やっぱり海老原一郎氏の美術館は必要だろうとか、そう考えるのが当然だと思えました。何れこのような作品に当たらなくてはならないのは分かっているのですが、千葉の最もポピュラーな建築で、しかも複合体であり、誰でも知っていて、しかもどうしてこうも人を集め、内容も不評を買ってはいないことを考えると、その大衆性について解明したくなってくるのです。

夏の夜、八時半になり、南からの風がある必ず私の家まで聞こえてくるのが、ディズニーランドの花火の音です。直線距離一六キロの南方から音が聞こえる時、大人であっても何となく胸が躍り、かつての日の、園内の興奮が戻るのを感ずるからです。　（続）